

**原爆の図丸木美術館 2013 年度企画展**  
**「坑夫・山本作兵衛の生きた時代～戦前・戦時の炭坑をめぐる視覚表現」報告**

- 1 展覧会名** 坑夫・山本作兵衛の生きた時代～戦前・戦時の炭坑をめぐる視覚表現
- 2 会期・会場** 原爆の図丸木美術館  
〒355-0076 埼玉県東松山市下唐子 1401 TEL0493-22-3266  
2013 年 7 月 13 日（土）～9 月 8 日（日）  
休館日：月曜休館（祝日は開館・翌平日休館）、8 月 1 日～15 日は無休
- 3 入館料** 大人 900 円 中高生または 18 歳未満 600 円 小学生 400 円  
団体（20 名以上）、60 歳以上、チラシ持参者、比企地区在住者 100 円引  
障碍（しょうがい）のある方は半額
- 4 入館者数** 総入館者数 4,272 人（開館日数 52 日 一日平均 82.2 人）

\*入館者の内訳

月	大人	中高生	小人	団体	無料入館	合計
7 月	404	68	21	0	88	581
8 月	2,144	378	234	169	301	3,226
9 月	398	8	9	21	29	465
合計	2,946	454	264	190	418	4,272

**5 展示主旨**

2011 年 5 月、田川市石炭・歴史博物館、福岡県立大学が保管する、故・山本作兵衛の炭坑絵画 589 点と日記・メモ類 108 点が、国連教育科学文化機関（ユネスコ）により「メモリー・オブ・ザ・ワールド」（MOW、通称・世界記憶遺産）に登録されました。それを契機として、現在、炭坑（鉱）への関心が寄せられつつあります。

作兵衛は、炭坑を見聞きすることがなくなる孫たちのため、「炭坑とはどういうものがあったか」を絵画として描き残しました。彼が自宅を訪れた人々に炭坑画を持ち帰らせたのは、世代を越えて炭坑への関心が広がるのを期待していたからではないでしょうか。

世界記憶遺産登録を機に、作兵衛の炭坑画の再評価が進められるのは喜ばしいことです。その一方、他の画家や写真家たちの炭坑を巡る表現を総合的に見渡し、それぞれの時代、それぞれの産炭地の炭坑イメージや表現に込められた意味を読みなおすことも重要です。

本展では、作兵衛が近しい人たちに遺した「炭坑画」をはじめ、同じ筑豊を描いた原田大鳳、井上為次郎、島津輝雄、山近剛太郎、常磐を描いた大宮昇らの絵画作品や、萩原義弘撮影による、戦時の軍需生産美術推進隊が全国に制作した坑夫像、大正期に町田定明が撮影した『三井三池各事業所写真帖』ほか各産炭地の主要石炭会社の写真帖など、戦前・戦時に生み出された各地の炭坑をめぐる幅広い視覚表現を検証します。

それらの表現からは、炭坑労働の実情や問題点の啓蒙、国家的要請での石炭増産体制の訴え、炭坑生活へのいとおしみなど、さまざまな思いが読み取れるはずです。

戦後、相次ぐ閉山によって石炭産業の火が消え、産炭地を除けば、これらの視覚表現はほぼ顧みられることがありませんでした。今こそ、作兵衛の「孫たちへの願い」を思い起こし、多くの炭坑の表現者たちが、炭坑をどのように受け止め、世に伝えようとしてきたのか、遺された作品群に目を凝らし、耳を澄まし、頭を巡らす時ではないでしょうか。

## 6 出品作家

山本作兵衛、井上為次郎、島津輝雄、山近剛太郎、原田大鳳、町田定明、大宮昇、本橋成一、萩原義弘

## 7 展示関連印刷物

チラシ A4版 両面4色

ポスター B2版 片面4色

美術館ニュース A4版 12ページ 両面1色（友の会会員向け）

## 8 展示関連イベント

### ● オープニングコンサート＋トークイベント「炭坑の視覚表現めぐって」

7月13日（土）午後2時

コンサート出演：緒方もも（ヴァイオリン、山本作兵衛曾孫）、奥野幸恵（ピアノ）、清水英里子（ヴァイオリン）

トークイベント出演：鳥羽耕史（早稲田大学教授）＋保坂健二郎（東京国立近代美術館主任研究員）＋正木基（casa de cuba 主宰）



●ギャラリーツアー

7月15日（月）、17日（水）－19日（金）、23日（火）－26日（金）

午前10時～午後4時まで随時 ツアーガイド：正木基



●特別ギャラリーツアー

7月23日（火） 午前10時～午後2時 ゲスト：徳永恵太（田川市美術館学芸員）

8月29日（木） 午後1時～午後4時半 ゲスト：中込潤（直方谷尾美術館学芸員）



●ギャラリートーク1「炭坑を語る」

7月27日（土）午後2時

出演：菊地拓児（コールマイン研究室）＋萩原義弘（写真家）＋ヤリタミサコ（詩人）



●ギャラリートーク 2「山本作兵衛を語る」

8月13日（火）午後2時

出演：井上忠俊（山本作兵衛孫・作兵衛（作たん）事務所所長）＋上野朱（古書店主）＋  
緒方恵美（山本作兵衛孫・作兵衛（作たん）事務所代表代理）＋本橋成一（写真家・映画  
監督）



●「入山採炭ほかスケッチブック」公開作品調査

8月20日（火）午後2時～3時30分

ゲスト：大宮真弓（大宮昇ご子息・同志社大学生命医科学部教授）＋萩原義弘  
聞き手：杉浦友治（いわき市立美術館学芸員）、正木基



●今野勉氏と炭鉱表現を語る

9月4日（水）14時～15時30分

ゲスト：今野勉（演出家、脚本家、テレビマンユニオン取締役）＋正木基



● トム・アレンツ氏と炭鉱を語り合う

9月8日(日) 午後2時～3時30分



9 主なメディア紹介

〈テレビ〉

テレビ埼玉 (ニュース番組にて企画展紹介)

東松山ケーブルテレビ (東松山市内、8月中は毎日15分紹介番組を放映)

〈新聞〉

「東京新聞」7月7日朝刊多摩・千葉・埼玉版 近代化の礎 炭鉱描く

「西日本新聞」8月6日朝刊文化欄 戦前・戦中の炭鉱に迫る

「日々の新聞」8月15日第251号 特集「記録し伝える」

「毎日新聞」8月17日朝刊埼玉版 炭鉱労働 生き生きと

「埼玉新聞」8月29日朝刊 時代映す炭鉱絵画

## 10 会場展示記録

### 【第1室】



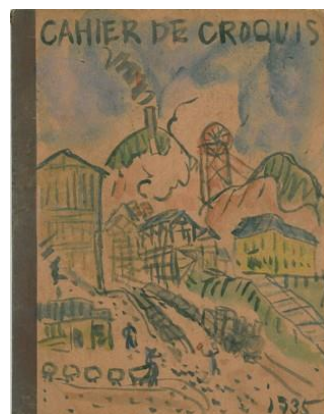
作品名	作者	制作年	素材	所蔵
炭山画譜 表紙 斜坑人車	大宮昇	1936年	石版、紙	個人蔵
口絵	大宮昇	1936年	石版、紙	個人蔵
炭の流れ[1] 万石	大宮昇	1936年	石版、紙	個人蔵
炭の流れ[2] 選炭場外景	大宮昇	1936年	石版、紙	個人蔵
炭の流れ[3] シャワー	大宮昇	1936年	石版、紙	個人蔵
炭の流れ[4] 撰炭婦	大宮昇	1936年	石版、紙	個人蔵
炭の流れ[5] 坑口にて	大宮昇	1936年	石版、紙	個人蔵
炭層へ[1] 盤岩機の男達	大宮昇	1936年	石版、紙	個人蔵
炭層へ[2] 瓦斯のある坑内にて	大宮昇	1936年	石版、紙	個人蔵
炭層へ[3] 坑内の捲場	大宮昇	1936年	石版、紙	個人蔵
炭山の街[1]	大宮昇	1936年	石版、紙	個人蔵
奥附 横向きの坑夫 瓦斯のある坑内にて	大宮昇	1936年	石版、紙	個人蔵
ドリルを持つ男	大宮昇	1936年	石版、紙	個人蔵
坑夫	大宮昇	1936年	石版、紙	個人蔵
炭山全図	大宮昇	1936年	石版、紙	個人蔵
炭山全図(モノクロ)	大宮昇	1936年	石版、紙	個人蔵
小さき苗	大宮昇	1937年	石版、紙	個人蔵
スケッチブック 4冊	大宮昇	1935年		個人蔵
好間炭鉱・ズリ山 (福島県いわき市)	萩原義弘	1998年	写真	個人蔵

### 大宮 昇

1901年、愛媛県松山市生まれ。戦前は日本版画協会に石版画を出品。35年に自ら入山採炭に赴き、坑内に下り取材した成果を、翌年に創作石版集『炭山画譜』として発表。42年には絵読本となり『石炭を生む山』として学習社から出版、文部省並出版文化協会から推薦を受けた。1944年には長野県に疎開し、敗戦とともに山本鼎の流れを組む農民美術草木染信濃紬の指導にも従事。51年に版画に専念し、57年に松山に帰郷し、その後は版画教育の普及につとめた。



今回新発見の「大宮昇スケッチブック」(全4冊)には約120点の丁寧なスケッチ、水彩が残されている。炭坑を知らない美術家の、炭鉱を知り尽くそう、描き尽くそうという執念からなるもので、坑外から坑内まで炭鉱のあらゆる場所での作業を徹底してスケッチしていて、炭鉱絵画として極めて貴重なものとなっている。



大宮は、翌年、スケッチから14場面を選び、磐城の平町高野氏工房にて石版画による創作版画集『炭山画譜』を制作、1942年にもスケッチを基に約40点の挿画を描き起こし、少年向け絵読本『石炭を生む山』を刊行した。写真の『入山採炭アルバム』、大宮昇によるスケッチブック、創作版画『炭山画譜』、絵読本『石炭を生む山』と併せ見ると、昭和前半期のひとつの炭鉱の視覚的記録がこれほどまとまった事例がないことに気が付かれるだろう。

展示資料	発行者	制作年	備考
入山採炭アルバム	入山採炭	1943年頃	
茨城採炭記念写真帖	茨城採炭	1923年	
みろく沢炭鉱資料館写真帖	渡辺為雄	1926年	
絵読本 石炭を生む山	学習社	1942年	大宮昇著

## 入山採炭アルバム

1944年に磐城炭礦と合併、常磐炭礦(常磐ハワイアンセンター、現在のスパリゾートハワイアンズの経営母体)となる入山採炭の戦前の写真帖。常磐でよく言われる「一山一家」の精神を表すように、福利厚生、保安安全を気遣う会社らしさが写真から読み取れる。坑内に仁王立ちするのは、後に常磐炭礦の社長となる大越新。1935年、入山採炭に長期間の取材をした美術家・大宮昇を案内したのが大越であった。

## みろく沢炭鉱資料館写真帖

みろくさわ炭鉱資料館は、1856年に片寄平蔵が石炭層を発見した福島県いわき市弥勒沢の渡辺為雄が自宅に開設した。両親の代から石炭発祥の地に住む渡辺は、岡田炭鉱瀧之沢坑全盛時の鳥瞰的な写真(1902年頃)を見つけたことから炭鉱写真を集め始め、炭鉱文化を後世に残す一念で出版した写真集が『みろく沢炭鉱資料館写真帖』である。



坑外夫、選炭婦、先山夫、児童の後山夫なども写した一山一家的な写真や、選炭場を鳥瞰する珍しい構図の風景写真、キャップランプをつけた女性の坑内作業写真など、常磐炭田の中小炭鉱=小ヤマの歴史的写真を網羅した貴重な写真集となっている。

【第2室】



炭鉱名	作品名	制作年	制作者	備考
夕張炭鉱	「進発」 「採炭救国」像	1944年6月	中村直人、古賀忠雄、圓 鏢勝三、木下繁	1984年撮影。北海道夕張市、石炭の歴史村(旧夕張二鉱繰込所前)
夕張炭鉱	「進発」 「採炭救国」像	1944年6月	中村直人、古賀忠雄、圓 鏢勝三、木下繁	北海道夕張市、石炭の歴史村(現在は旧夕張二鉱繰込所前から生活館前に移設)
三井砂川炭鉱		1945年8月	長沼孝三、野々村一男、 菅沼五郎、中野四朗、峯孝	同鉱業所から修復され、かみすながわ炭鉱館前に移設(北海道上砂川町)
三井芦別炭鉱	坑夫像	1994年	古賀忠雄ら	1994年撮影。1997年解体され現在はレプリカ(北海道芦別市)
古河好間炭鉱	「産業戦士の像」	1944年	長沼孝三、圓鏢勝三、中村直人、木下繁、峯孝	(福島県いわき市)
常磐炭鉱	「総蕨起」像	1944年	古賀忠雄、中川為延、林是、野々村一男、中野四朗、清水多嘉示	いわき市石炭・化石館前(福島県いわき市)
東山油田	「敢闘」像	1944年	中村直人ら	修復され長岡市立桂小学校に移設(新潟県長岡市)
新津油田	坑夫像	1944年	不明	(新潟市秋葉区)
西山油田		1944年	林是、川上全次ら	新潟県出雲崎石油記念館に移設
日炭高松炭鉱一砦	坑夫像	不明	不明	1966年に解体 1954年撮影福岡県水巻町歴史資料館提供
日炭高松炭鉱二砦	坑夫像	不明	圓鏢勝三ら	福岡県水巻町歴史資料館
九州の三井某炭鉱	「滅敵」の像	1944年	古賀忠雄、木下繁、中川為延、大須賀力、峯孝	現存せず、制作場所不明(朝日新聞全国版1944年9月12日紙面より)

軍需生産美術推進隊

1944年4月8日に洋画家の鶴田吾郎を隊長として結成。軍需省より指定された軍需工場や炭鉱、鉱山などを訪れ、戦意高揚や慰問激励として絵画や彫刻を制作、軍需生産を推進させる事を目的とした。彫刻班は中村直人、古賀忠雄、圓鏢勝三らが北海道、常磐、九州の炭鉱や新潟の油田を訪れ坑夫像を制作した。全国で11体の存在が確認され、レプリカを含めて9体が現存している。(坑夫像撮影はいずれも萩原義弘)





夕張炭鉱「進発」「採炭救国」像  
萩原義弘撮影



救護隊の像(筑豊)

展示資料	作者	制作年	所蔵
救護隊の像(筑豊)	不明	不明	個人蔵
みけのくに	町田定明(撮影)	1959年	個人蔵
三井三池各事業所写真帖	町田定明(撮影)	1926年	個人蔵
三井三池炭鉱 鶏卵写真5点	不明	明治期	個人蔵
北海道炭礦汽船記念写真帖 (三越呉服店写真部発行)	柴田常吉(撮影)	1910年	個人蔵
北海道炭礦汽船創立満三十年記念写真帖	三越写真部	1910年	個人蔵
北海道炭礦労務者大募集ポスター		戦時期	夕張地域市研究資料調査室蔵
溜川炭礦アルバム		1925年	個人蔵
飯塚市市制記念産業博覧会ポスター		1932年	個人蔵
山本作兵衛翁	本橋成一(撮影)	1977年	

### 三井三池各事業所写真帖

大牟田市町田写真館主・町田定明は、三井三池炭鉱の公認的な写真師として『三井三池各事業所写真帖』を撮影、刊行した。

鶴嘴とカンテラをもつ『採炭夫』の写真は、坑内に照明を持ち込み、美しく端正な坑夫「肖像」写真のように撮影、広く流通する坑夫の「記録」写真と一線を画している。

冒頭、町田定明を写真「師」と記したが、写真「家」の表現へと架橋する仕事の質を持っていたことを、『三井三池各事業所写真帖』は何わせてくれる。

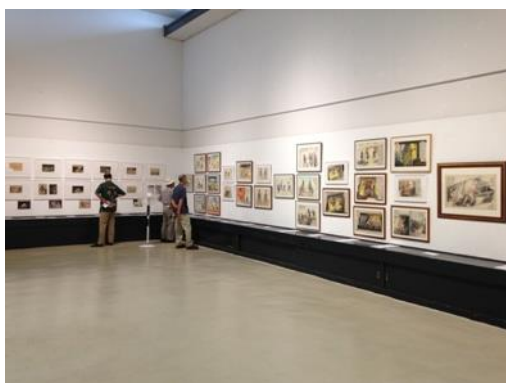
5人の男女坑夫の採炭から炭車への石炭積載までの坑内作業を一枚の写真で説明した写真には、5人共同ポーズの着衣と脱衣の写真二種がある。採炭作業は地熱の暑さで裸体作業が強いられるが、『三井三池各事業所写真帖』に着衣の写真を掲載したのは、世間へのイメージづけだったのだろうか。当時の写真機、フィルムの性能を考えると、坑内では露光時間の間、坑夫たちにポーズを取らせ続ける撮影となったのも作業ポーズに力が入っていないことなどからわかるだろう。



### 溜川炭礦アルバム

溜川炭礦は第一次大戦後、ドイツから戦利財産のひとつとして引きついた山東省の炭鉱。当時坑内は水没し、機械類などは撤去されていたが、中村雄次郎満鉄総裁の命により復旧し、良質の石炭を産出する炭鉱となった。1921年には藤田組と大倉組が共同で溜川炭礦株式会社を設立した。

【第3室】



作品名	作者	制作年	素材	所蔵
ツキノミ	山本作兵衛	1967年	水彩・紙	個人蔵
採炭法マイトなし	山本作兵衛	1967年	水彩・紙	個人蔵
明治筑豊バラスラ	山本作兵衛	1970年	水彩・紙	個人蔵
明治バラスラ	山本作兵衛	1970年	水彩・紙	個人蔵
明治筑豊バラスラ	山本作兵衛	1973年	水彩・紙	個人蔵
明治筑豊バラスラ	山本作兵衛	1983年	水彩・紙	個人蔵
ヤマ人と入墨	山本作兵衛	1969年	水彩・紙	個人蔵
明治掘進夫の断層切抜き	山本作兵衛	1981年	水彩・紙	個人蔵
明治筑豊スラとバラ	山本作兵衛	1969年	水彩・紙	個人蔵
仕操方 枠入れ	山本作兵衛	1973年	水彩・紙	個人蔵
セナ 低層卸し切羽	山本作兵衛	1973年	水彩・紙	個人蔵
明治だけのセナ	山本作兵衛	1967年	水彩・紙	個人蔵
明治セナ	山本作兵衛	1970年	水彩・紙	個人蔵
明治セナ	山本作兵衛	不明	水彩・紙	個人蔵
採炭 先山 後山	山本作兵衛	1973年	水彩・紙	個人蔵
先山 後山	山本作兵衛	1964年	水彩・紙	個人蔵
立掘り 先山 後山	山本作兵衛	1970年	水彩・紙	個人蔵
明治バンガヤリ	山本作兵衛	1973年	水彩・紙	個人蔵
バンガヤリ上三緒三尺層	山本作兵衛	1973年	水彩・紙	個人蔵
低層炭 坐り掘り	山本作兵衛	1973年	水彩・紙	個人蔵
カブダシ	山本作兵衛	1967年	水彩・紙	個人蔵
ヤマの癌 食い違い	山本作兵衛	1967年	水彩・紙	個人蔵
アゲアナくりとノミ焼き直し	山本作兵衛	1967年	水彩・紙	個人蔵
母子入坑	山本作兵衛	1974年	水彩・紙	個人蔵
アサガオ	山本作兵衛	1967年	水彩・紙	個人蔵
母子入坑	山本作兵衛	1967年	水彩・紙	個人蔵
ミセシメおもり責め	山本作兵衛	1967年	水彩・紙	個人蔵
ヤマ人のレットル	山本作兵衛	1977年	水彩・紙	個人蔵
明治中期ホリモノ	山本作兵衛	1974年	水彩・紙	個人蔵
明治坑内馬	山本作兵衛	1973年	水彩・紙	個人蔵
選炭場	山本作兵衛	1973年	水彩・紙	個人蔵
明治・大正・昭和安全灯と坑内姿	山本作兵衛	1967年	水彩・紙	個人蔵
ポタ山がピラミッド形	山本作兵衛	1980年	水彩・紙	個人蔵
船頭と陸蒸気	山本作兵衛	1969年	水彩・紙	個人蔵
ヤマの浴場	山本作兵衛	1975年	水彩・紙	個人蔵
ヤマの浴場	山本作兵衛	1974年	水彩・紙	個人蔵
ヤマの浴場	山本作兵衛	不詳	水彩・紙	個人蔵
明治筑豊ヤマの浴場	山本作兵衛	1977年	水彩・紙	個人蔵
ヤマの洗炭機	山本作兵衛	1968年	水彩・紙	個人蔵
坑外設備クリッパー	山本作兵衛	1968年	水彩・紙	個人蔵
ヤマの道具	山本作兵衛	1969年	水彩・紙	個人蔵

作品名	作者	制作年	素材	所蔵
会社の喧嘩	山本作兵衛	1969年	水彩・紙	個人蔵
会社と喧嘩松岡陸平の仲裁	山本作兵衛	1969年	水彩・紙	個人蔵
明治中期 豊前会社の喧嘩	山本作兵衛	1978年	水彩・紙	個人蔵
個人蔵舞子の浜	山本作兵衛	1982年	水彩・紙	個人蔵
九州鉄道筑豊線	山本作兵衛	1971年	水彩・紙	個人蔵
ヤマのゴリョンさん	山本作兵衛	1967年	水彩・紙	個人蔵
明治ヤマの坑夫ナヤ	山本作兵衛	1967年	水彩・紙	個人蔵
降参言わせゴッコ	山本作兵衛	1968年	水彩・紙	個人蔵
明治末期ヤマの正月	山本作兵衛	1980年	水彩・紙	個人蔵
ヤマの子供 魚釣り	山本作兵衛	1967年	水彩・紙	個人蔵
シカンカ何本	山本作兵衛	1968年	水彩・紙	個人蔵
ヤマのデンキと石油ランプ	山本作兵衛	1968年	水彩・紙	個人蔵
朝鮮人の飴売り	山本作兵衛	1980年	水彩・紙	個人蔵
明治ヤマの飲み水	山本作兵衛	1969年	水彩・紙	個人蔵
ポタ山	山本作兵衛	1970年	墨・紙	個人蔵
明治セナ	山本作兵衛	1977年	水彩・紙	個人蔵
低層 先山 後山	山本作兵衛	1976年	水彩・紙	個人蔵
バツテラ	山本作兵衛	1975年	水彩・紙	個人蔵
明治ヤマの浴場	山本作兵衛	1977年	水彩・紙	個人蔵
山本作兵衛翁	本橋成一	1977年	写真	
山本作兵衛翁	本橋成一	1977年	写真	

## 山本作兵衛

1892年福岡県嘉麻軍笠松村鶴三緒（現飯塚市）生まれ。父は遠賀川の川舟船頭。数え年8歳の春、はじめて坑内に下がり、以後採炭夫や鍛冶工として筑豊各地で働く。その合間に日記や手帳に炭鉱の記録を記し、余白に文章を書き加える独特の記録絵は1957年頃から描きはじめる。田川市石炭・歴史博物館が所蔵する絵画585点、日記、雑記帳や福岡県立大学が保管する絵画4点、日記、原稿など計697点が2011年にユネスコの「メモリー・オブ・ザ・ワールド」（MOW、通称・世界記憶遺産）に登録される。



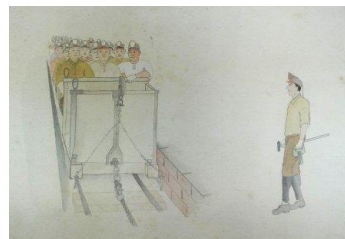
## 本橋成一

1940年東京生まれ。写真家、映画監督。九州・北海道の炭鉱の人々を撮影した『炭鉱〈ヤマ〉』でデビュー。同作品は第五回太陽賞受賞。現在に至るまで魚河岸、上野駅、サーカス、屠場など市井の人々をテーマにした作品を数多く残している。また1998年、チェルノブイリ原発事故の被災地を撮影した映画『ナージャの村』を初監督、同名の写真集は第17回土門拳賞を受賞。映画『アレクセイと泉』は第52回ベルリン国際映画祭ベルリナー新聞賞、国際シネクラブ賞を受賞。主な写真集に『炭鉱〈ヤマ〉』、『上野駅の幕間』、『昭和藝能東西』、『屠場〈とば〉』など。

作品名	作者	制作年	素材	所蔵
炭坑絵巻	原田大鳳	1938年	水彩・紙	個人蔵(直方市石炭記念館寄託)
小炭坑の坑道仕操	島津輝雄	不明	水彩・紙	個人蔵
炭坑の大晦日風景	島津輝雄	1971年	水彩・紙	個人蔵
小炭坑でテボをからう女坑夫	島津輝雄	1971年	水彩・紙	個人蔵
回想の馬車坑道	山近剛太郎	1984年	ペン画彩色・紙	直方市石炭記念館蔵
スケッチブック	山近剛太郎			個人蔵
セナを担ぐ後山(三池炭坑の女)	井上為次郎	不詳	水彩・紙	個人蔵
スラ曳き	井上為次郎	不詳	水彩・紙	個人蔵
セナを担ぐ後山(男)	井上為次郎	不詳	水彩・紙	個人蔵
水を呑む後山	井上為次郎	不詳	水彩・紙	個人蔵
炭を移す後山	井上為次郎	不詳	水彩・紙	個人蔵
制裁	井上為次郎	不詳	水彩・紙	個人蔵
坑内出産	井上為次郎	不詳	水彩・紙	個人蔵
切羽	井上為次郎	不詳	水彩・紙	個人蔵
風呂	井上為次郎	不詳	水彩・紙	個人蔵
火災	井上為次郎	不詳	水彩・紙	個人蔵
納屋頭	井上為次郎	不詳	水彩・紙	個人蔵
ケツワリ	井上為次郎	不詳	水彩・紙	個人蔵
三人の男女	井上為次郎	不詳	水彩・紙	個人蔵
仕操夫の夫婦	井上為次郎	不詳	水彩・紙	(複写)
火番所	井上為次郎	不詳	水彩・紙	(複写)
交代時の風景	井上為次郎	不詳	水彩・紙	(複写)
ヤマを支配する五人の男たち	井上為次郎	不詳	水彩・紙	(複写)
セナを担ぐ後山(女)	井上為次郎	不詳	水彩・紙	(複写)

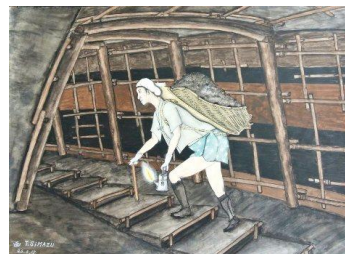
### 原田大鳳

1901年生まれ。本名・観吾。筑豊の大手炭鉱である貝島炭礦で10代後半から働きはじめ、20代の頃に飯塚市の画家に師事して大鳳の画号を名乗った。1938年、会社の命を受けて、貝島炭礦大之浦六坑（福岡県宮若市）の一日の様子を長さ8メートルの絵巻物に描いた。



### 島津輝雄

1927年生まれ。筑豊の炭鉱を転々とし、坑内現場係を務めた新目尾鉱（福岡県鞍手郡鞍手町）が閉山した1971年に、30点程の記録画を制作した。



### 山近剛太郎

1902年生まれ。26年に筑豊の貝島炭礦に入社し、現場の指導、監督にあたり、後に貝島炭礦の重役として、特に防災体制の確立に貢献した。若い頃から絵に関心があり、福岡で画塾を主宰していた創元会会員の洋画家・手島貢に師事し、坑内の様子をスケッチした。



## 井上為次郎

1898 年、福岡県宗像市に生まれる。炭坑労働者の家庭に生まれ育ち、幼い頃から全国各地の炭坑を渡り歩いて働く。終戦後、九州採炭会社笹原炭鉱で働いていた頃から、炭鉱の記録画を描きはじめる。坑夫自身が炭鉱の風俗を絵に残したことで山本作兵衛よりも早く、恐らく筑豊で最初の例であろう。1970 年、宮田町にて病死した。その経歴や家族構成など、不明な点が多い。



書籍名	作者	制作年	出版社
炭塵	三好十郎	1931 年	中央公論社
炭坑	橋本英吉	1935 年	ナウカ社
現代暴露文学選集 炭坑	橋本英吉	1935 年	天人社
生活文学選集第 5 巻 坑道	橋本英吉 中川一政(装幀)	1939 年	春陽堂
筑豊炭田	橋本英吉 大宮昇(表紙絵)	1943 年	今日の問題社
炭礦讀本	吉見實	1926 年	筑豊石炭鉱業会
労働科学研究所報告第 4 部 勤労文化第 5 冊 炭鑛作業圖説	暉峻義等	1943 年	労働科学研究所
炭田の人々	筑紫聡 松野一夫(絵)	1941 年	『サンデー毎日』挿絵 (通巻 1120 号)
炭礦の凱歌	筑紫聡 大野鐵雄(装幀)	1943 年	新正堂
小説 石炭	小糸正世	1944 年	昭和刊行会
炭山の虹	菊童梨朔 斑目榮二(装幀挿画)	1943 年	富文館
観察繪本ミクニノコドモ 第 16 頁第 11 編 セキタンヲホルヒト		1944 年 1 月	日本保育館
炭礦戦士	小田俊與 今村俊夫(画)	1945 年	大日本雄辯会講談社
科学繪話 地中の寶の話	ピーターシャム 訳: 内山賢次 装幀: 松山文雄	1942 年	フタバ書院成光館
小学校科学繪本第 9 巻 石炭	箕作新六(編) 山下謙一(画)	1937 年	東京社
Story Book Of Coal	Maud & Miska Petersham	1935 年	The John C. Winston company
The story book of earth's treasures	Maud & Miska Petersham	1935 年	The John C. Winston company
落盤	手塚治虫	1959 年	鈴木出版
新週刊 1962 年 4 月 20 日号	表紙は大崎八幡宮炭鉱絵馬。岡村昭彦編集長が発見、表紙に使用。		

## 炭鑛讀本 炭鑛作業圖説

炭鑛の近代産業化によって、効率的かつ安全な技術習得ばかりでなく、炭鑛労働者の意識と技術の近代化を併せ図る『炭鑛讀本』のようなハンドブックが配布されるようになる。『炭鑛作業圖説』は労働科学研究所の絵心のあるスタッフが坑内に入り、安全かつ効率よい採炭方法を見定めようとスケッチと水彩で記録したもの。写真機材の機能上また保安上撮影に適さない坑内で、スケッチの即興性、軽便性がいかんなく発揮されている。

日本プロレタリア演劇運動における代表的な戯曲『炭塵』。表紙周りには、この戯曲を舞台化した際の坑内のセットと思われる写真が使われている。

プロレタリア文学の最後の成果と言われる長編『炭坑』の赤表紙はプロレタリア文学の名残か。炭鑛生活文学と言うべき、『坑道』装幀の中川一政による明るい色使いは、その生活感を反映しているのだろうか。筑豊の炭鑛開鑿者群像を物語る『筑豊炭田』表紙の大宮昇による太い線描の坑夫には、毅然たる思いが漲っているかのよう。

## 炭田の人々 炭山の虹 小説 石炭

炭鑛に生まれ育った筑紫聰は、戦時下の川筋気質の産業戦士という坑夫像を描いた「炭田の人々」で『サンデー毎日』の「第 28 回大衆文芸」に入選。『新青年』等の表紙絵で知られる松野一夫の挿絵は、スケッチの味わいを残している。炭鑛の寡婦の国民的覚醒を描いた菊童梨朔の『炭山の虹』、炭鑛の模範的産業戦士の父親像を描いた小糸正世『小説 石炭』等にも、戦時下石炭増産の国家的要請への呼応がなされている。

## 筑豊炭田

第 1 室に展示されているように、1935 年に常磐炭田入山採炭取材、スケッチブック 4 冊と版画集『炭山畫譜』に加え、7 年後、大宮昇は「小産業戦士」向けに本書を執筆。「甥の三郎君」に約 40 点の挿図と書簡で炭鑛労働を紹介。「三郎君」は友人の児童文学者塚原健二郎の愛息の、やはり児童文学者となる亮一で、親しみの思いが皇民教育臭さを免れさせている。

## セキタンヲホルヒト 炭鑛戦士

「特派記者及び畫家の現地描寫」による幼児向け『セキタンヲホルヒト』は、採炭から石炭搬送までを紹介、敵を負かす船、飛行機、弾丸を作るため石炭を掘れ！と結ぶ。『炭鑛戦士』も「セキタンハ ダイジナ ダイジナ グンジュシザイデス」と訴える。それに反して今村俊夫の絵は、炭鑛に生活する人々の情景を、児童に親しめる柔軟な線描とやわらかな色彩の絵柄で描き、今なお好感が持てる。

## The story book of earth's treasures Story Book Of Coal

### 科學繪話 地中の寶の話 小學校科學繪本第 9 卷 石炭

リトグラフの挿図と科学的な解説による Maud & Miska Petersham 夫妻) の児童向け炭鑛本 'The story book of earth's treasures' (1935) は米国でのロングセラー (炭鑛の章を単行本化した 'Story Book Of Coal' も同時刊行)。『科學繪話 地中の寶の話』はその翻

訳で、原著の挿図を再現している。一方、原著者名も原著名も記載がない『小學校科學繪本・第9巻 石炭』は、山下謙一の装幀挿絵は図柄そのままだが、モダンな色彩かつさわやかなイメージに変換は鮮やか。

## 落盤

手塚治虫の『落盤』は、20年前に落盤事故で父親を失った少年が、同僚に仕掛けられた殺害であったことを明らかにしていく物語。進行につれてギャグ漫画風から劇画調へと落盤事故の描写が変化し、手塚が劇画表現を意識した時代の実験作のひとつとなっている。1959年の作で、手塚も筒切りにして坑内の描写をしていることに注目したい。作兵衛が坑内筒切りを描き始めたのは1958年頃だが、手塚もまだ作兵衛の絵の存在を知らず、同時多発的に似たような表現がなされたのは興味深い。作兵衛が独自に、この表現を生み出したのは、何よりもわかりやすさを求めたからだ。この作品の現在の掲載誌は、『花とあらくれ—手塚治虫劇画作品集』（2008年、小学館クリエイティブ）。

資料名	制作年	制作者・発行者	備考
大日本物産図会 56 伊賀国 石炭山之図	1877年	歌川広重(三代)	錦絵
杵島炭礦初見追憶乃枝折	1940年	渋谷一洲	折帖・全13図
住みよい働きよい常磐炭田		磐城炭鉱平職業紹介所	
入山採炭株式会社坑務所就業案内			就業案内
炭都飯塚市之景勝		吉田初三郎	絵葉書
飯塚市鳥瞰図		吉田初三郎	印刷物
長尾礦業所全貌 記念写真帖	1941年		山本作兵衛旧蔵
貝島炭鉱株式会社写真帖	1918年		
炭住の家庭アルバム複写	戦前と思わ れる写真	本橋成一(複写)	作品
磐城炭礦株式会社	1933年以後	磐城炭礦株式会社	サイレント映画 10分
躍進夕張	1937年	北海道炭礦汽船株式会社 50周年記念	サイレント映画 42分

## 長尾礦業所全貌 記念写真帖 貝島炭業株式会社写真帖

『長尾礦業所全貌 記念写真帖』は、長尾炭業が経営した中小炭鉱の1940(昭和15)年頃の全容。麻生・安川・貝島の筑豊御三家の炭鉱会社のひとつ『貝島炭業株式会社写真帖』と比較すると、規模の違いがよくわかれよう。が、長尾炭業所長として写真がかかげられている長尾達生が作兵衛の作品に着目、最初の作品集発行の契機を作った作兵衛評価の先駆けであることはもっと知られてもいいことだろう。

## 炭住の家庭アルバム複写

ぼくが筑豊に通い始めたのは1964年のことでした。1970年、ぼくが撮り始めた時には既に炭鉱から失われていた風景や、東京に住むの人間には撮れないような写真を家庭のアルバムから集めようと炭住の家々を訪ね、複写してまわりました。そこには生活と家庭の歴史、つまり近代の歴史が写っていました。それは山本作兵衛さんの作品とまったく同じことなのではないでしょうか。

—— 本橋成一(写真家)